清南早學問 一

手 麦6
571
1

門 6
號 571
卷 1-4

訓點千字文并文字正誤辨附錄

華道指南早學問

浪華 書林文精堂梓

京都帝國大學圖書

華學要論序

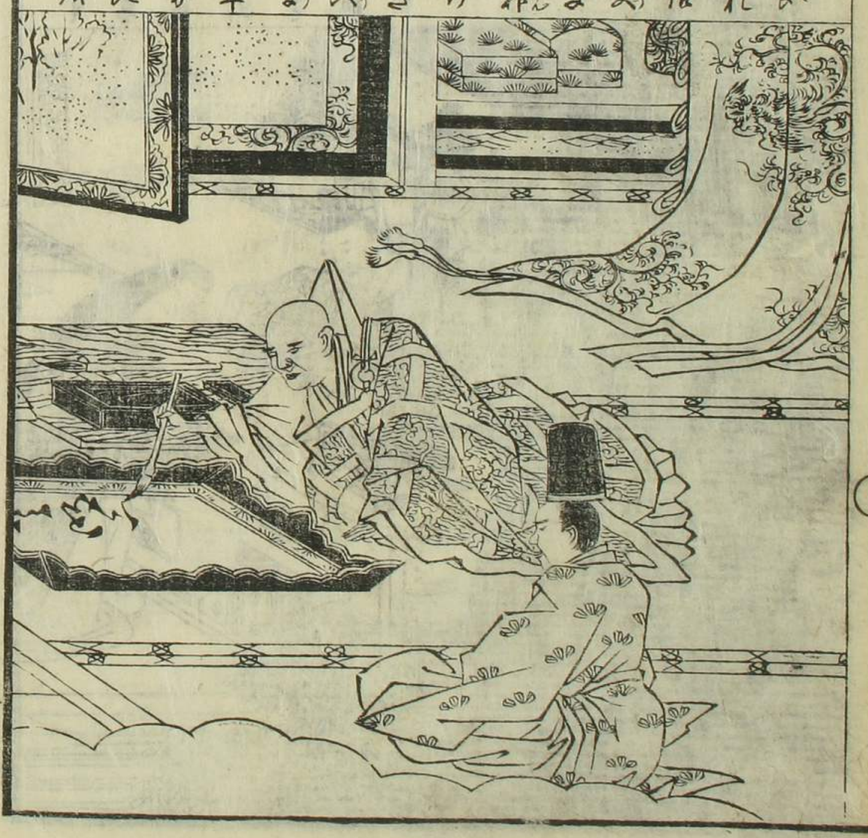
夫文字也其起尚而其傳亦久矣在昔吾東方天枝尊圓王繼二聖三賢之蹤而發萬世日用之玄奥到于今冠其息澤於天下矣尒来雖其流相傳而其實稍衰矣況浪華之玄泉先生獨汲其舊流而善諸書矣嘗依門人之請而著華學要論一篇矣為其書也曾揭古人

之言而間又以
其後其功亦勤兵余曰傳焉
傳焉哉登高必自卑此書雖以
國字豈不裨益童蒙哉故畧贅
其首以示乎同志幸行而幼學
之士若有知焉庶幾乎為昏學
之一助也先生之所著諸書未
行也其詳今不具列云
審曆戊寅冬十月掛南源將興
謙序

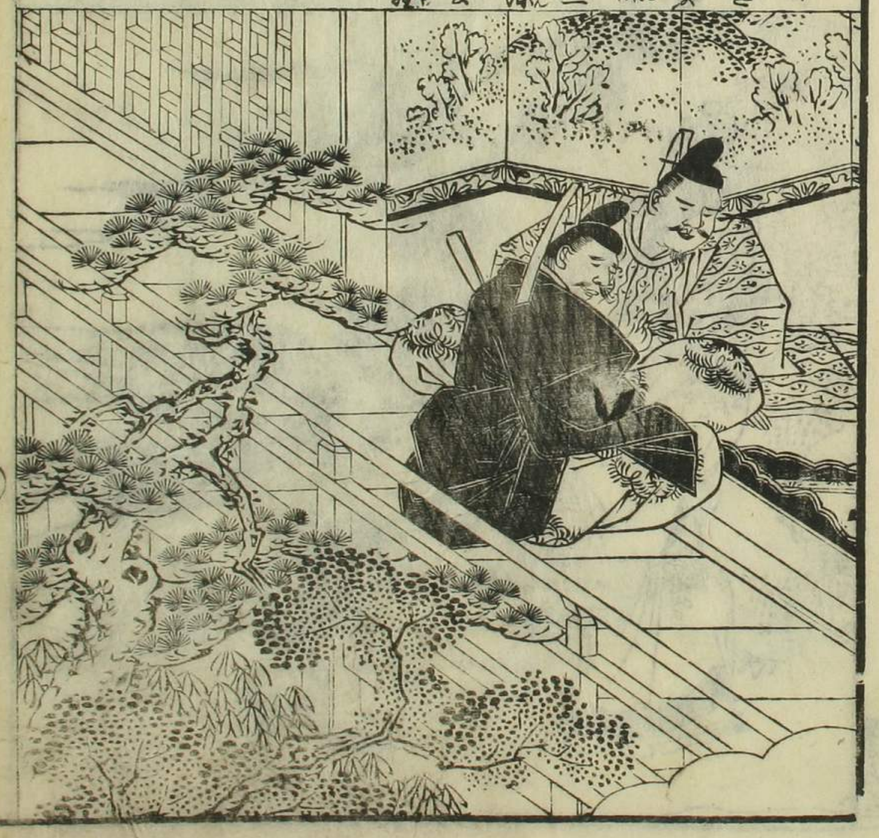
後鳥羽の天皇諱い祚地
桓武天皇の御子平城帝
の御孫なり幼くして明
敏書を懐るを好また
まひ長ずるに随ひ博く
經史に通じ文章を
善くし能書妙を
得給ひ嘗て大内裏を
営み給ふに東面の門三
の額に天皇自ら御筆を
染させ給ひ南面の門額三
を弘法大師に命じて書
しめらし北面の門額三い
掲げ給ひ西面の三額小地

英材に命せらるべし
尚御の名を後世に
の祖なり建和九年七
月十八日崩御御歳五
十七謚を後鳥羽天皇と
申奉る天皇後鳥羽の地
の優雅なる筆蹟
給ひ給ふ
御書なり
地名を以て
謚号と
奉る
後世の後
月人

弘法大師は讃岐國善
通寺郡屏風浦に生れ
給へり父は佐伯氏
母は阿刀氏の女なり夫
婦記十年目に給へども未
だ男子を得給ひ佛神
に祈り給へる夜の
夢に天より一人の童子
降あまくだり給ひ懷に入
給へと見て驚て目覺
ぬ寛亀五年庚寅年
御誕生あり幼稚に時か
聰明英智凡人に超
給へり



徹し書を讀で其日に
報ぜ卷いるるとき雖き
書は未だ[illegible]
[illegible]
して却て人給へ人延暦十二
年入唐して佛法の源
理をきはめ大日尼経を
傳朝し弘仁七年[illegible]
[illegible]
大伽藍と建立
嘉和二年三月廿一日
世壽六十二才
[illegible]
竜宮に入定し給へ

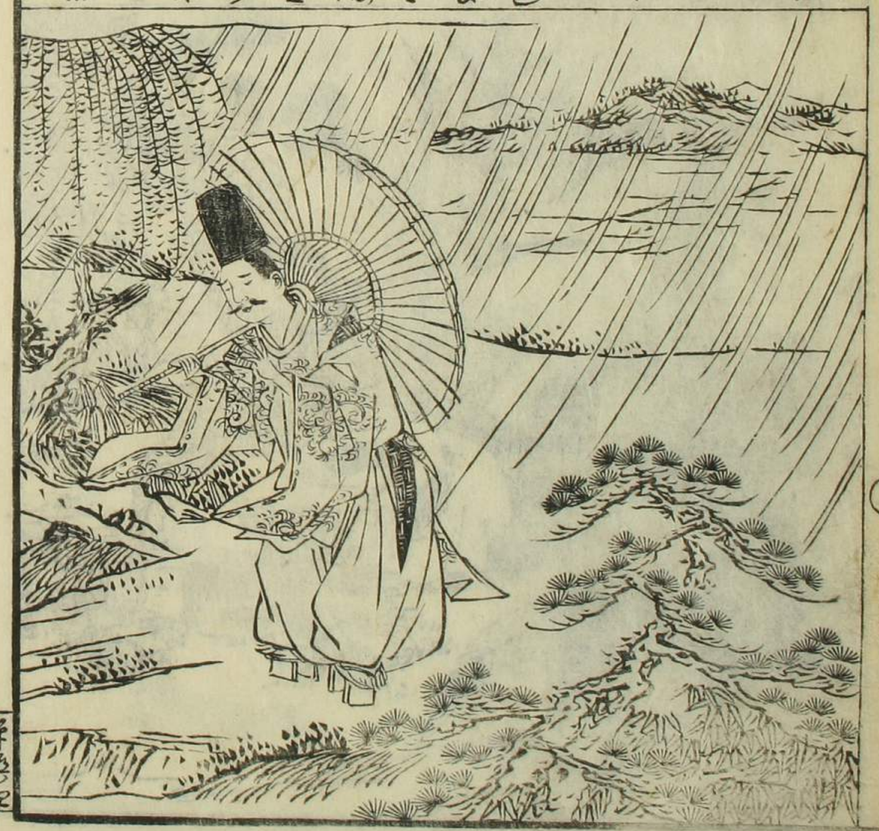


橘逸勢は右中辯入居
がみなりゐる人放縱な
して細節にとらはれず
最隷書を妙にして時
の人能書と稱した大裏
の門榜を書しめらる延
暦の末遣唐使に從ひ
て唐に到る唐人ども
逸勢が才能能書を傾
稱し橘奏の才と呼ぶ
弘仁の末和七年但馬
檢校となる橘逸勢は
健拳と謀て皇太

順貞とをしへて東國に
奪を乱を起し捕えと
りて伊豆國に配流せ
られ又遠江國板築
の罪に到て配流後加
祥三年正月位下に
贈位せられ仁壽
三年後に位下に
もとめられ永く
爭ひし祖と
なりましぬ

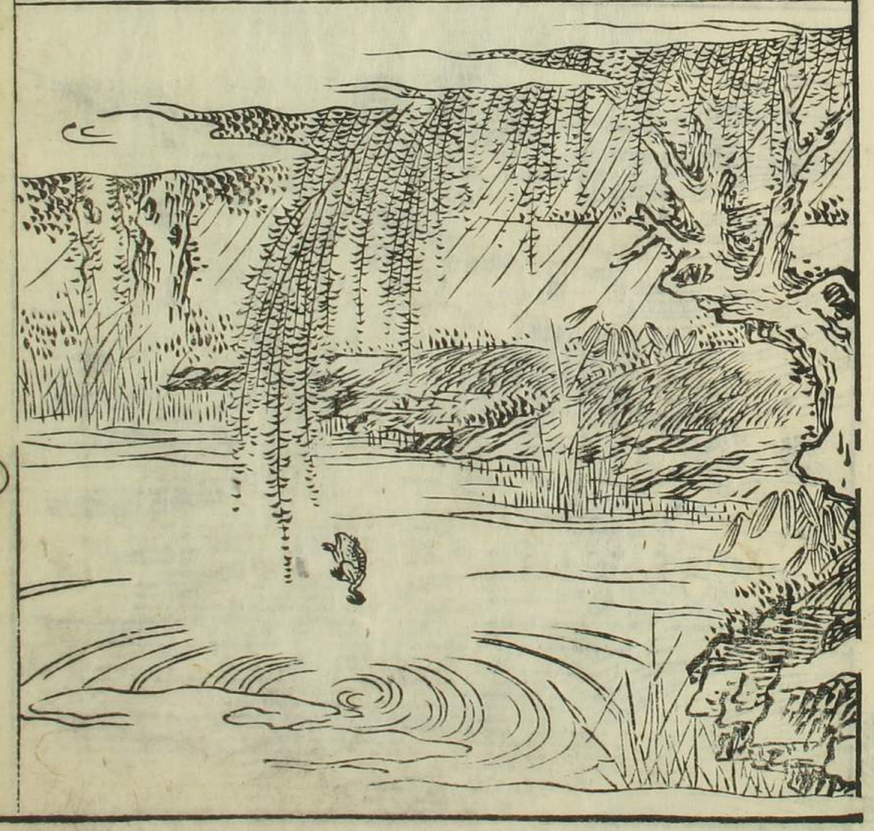
崇徳天皇
備前室海
橘逸勢と
日本の三筆中
稱した

小野の篁の風い賞の孫好古
が分たつ中朝絃書の
逸冠硯瑚朱雀村上
の二朝に仕へ山陽伯下
内義檢既に多の硯瑚
帝其書を愛し給ひ
て紛草の法帖一卷を宮
さしめ僧寛達をして
りろにへ送しむ篁の風
が絃書の名代英國を
輝し給ふ村上帝の
御代橘直幹が奏ける
奏疏を書帝其書を
賞嘆して爲右衛



篁の風

帝左右に向て直幹
あり帝左右に向て直幹
が疏い出よとのたまひけるや否や
とうひさく其他を向給ひ
道風晩年中風を病く
に震へり書体いよ〳〵
よりて人の用ひ難く
成其書一紙價金〇人九
人競てこれを求む得ざる
者い以て恥とし世の人
貴まるこの如くなり
後世の風と倫理紛
を三蹟と稱し世の定説
となれるの冠なるべし

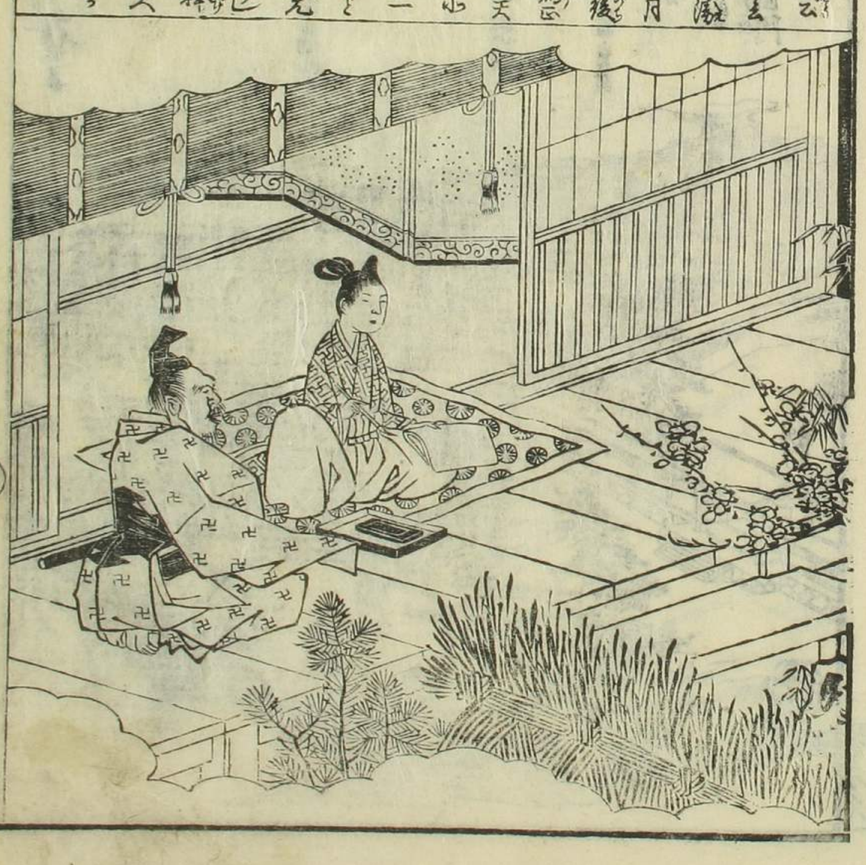


俤理卿い義原実教
卿の孫敦敏のよう
能書の名あく亀明
親王義原行成名と
あしくゆゆ天徳天
元の間累々宮参議
より従三位に叙せる
正暦中に吉家大弐に
補伊豆嘗て筑紫より
京に帰るに伊豫の海
岸に紅を流しに要風
湾を乱し艘と解す
をなれば其夜三隆明神
其社務に告て俤理

卿の書と偽いたまへ
社務見てけりと俤理
卿に申しに俤理とる
うち筆紙墨
数行を書に
附ふ風や
波おだやか
うゝ多紅と咲き
都に
のぶるぬ
其蘆の葉に
通ふ名
これをんて
紅葉

菅原道真公は参議是善
卿の伜なれども幼くして類稀明
敏十一歳の時詩を綴りた
まふ
月耀如晴雪梅花似帰雲
可憐金鏡裏疑是庭上珍
昌泰二年正三位右大臣に昇
進し政を執行ひ
給ふ嘗て三代実録八十巻
を修め数年国史三百巻を
撰し給ふの類撰多集
法明抄菅家日記名月集等
のうつの事最長じ給ひて
韓柳の説より詩文妙なり
白居易が韻を学ぶ
当時海内の冠後世称賞た

の祭を貴び空海の風を尊ぶ
と称して百年の後奥州
延喜元年を宰相中将右大臣
中納言に任ぜられ同三年二月
廿六日配所にて薨じ給ふ後
延長元年本官に還復し贈正
二位太宰帥と称ら天
暦元年社を石山に遷し
理社と称し正暦に年贈正一
位左大臣又神と天満天神と
崇め給ふ後一條帝寛弘元
年帝小社の紀を改め
より代々の天皇幣帛を捧
祭礼を設け崇仰給ふ後
世威孫堂々繁昌する
これを信ぜざらんや

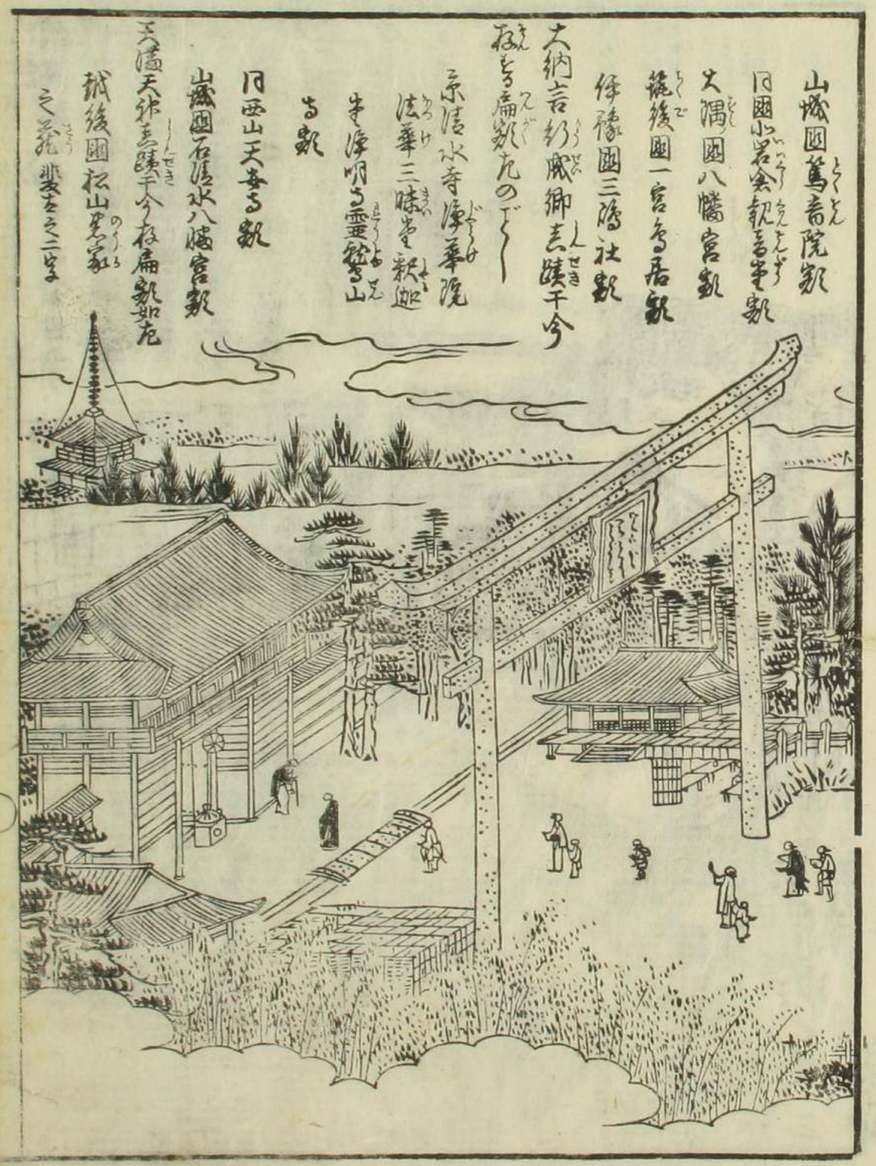


清盛天皇宸翰千今ありて
扁額左の如し
東師若田社額
同蓮華寺額
同辨天社額
弘法大師毒蛇千今ありて扁額
左の如し
應天門額
會昌門額
大和國金峯山第一多階
第二ありて
東師東寺什物八幡宮額
河内國觀心寺額
信濃國善光寺額
東師東山靈山國阿
彌額

大和國泥川瀧泉寺額
下野國日光山瀧尾社額
天言院宣陽門長樂門
常樂門真觀殿義堂
門南嶽門額
大和國法華寺村移豆古額
伊豫國古三津村
伊光寺額
小神乃風志伝千今ありて
扁額左のごとく
東師靈山薬殿院
額
摂津國住天王寺額
三河國瀧山寺二王門額
摂摩國極楽山源去寺額
山城國西岡白日社額

山城國龍寺釈迦堂
樓門額
同國八幡八王子社額
越前國吉崎府親鸞ゆかりの額
尾張國熱田社東門額
奈良長楽寺額
紀伊國柏崎永徳寺額
常陸國白雲紀僧ゆかり額
大和國金峯山寺二ツ
ゆかり額
丹後國天橋立籠
社額
同國井水合龍ゆかり額
山城國ゆかり社額
参議徳殿御去跡千今
ゆかり扁額尤のごとく

山城國鳥羽院額
同國小倉宮額ゆかり額
大隅國八幡宮額
能登國一宮ゆかり額
伊豫國三島社額
大納言紀貫之御去跡千今
ゆかり扁額尤のごとく
京清水寺浄華院
法華三昧堂釈迦
牛浄明ゆかり霊鷲山
ゆかり額
同西山天満ゆかり額
山城國石清水八幡宮額
天満天神去跡千今ゆかり扁額如尤
紀後國松山ゆかり額
こゝ元悲をこゝにまた



朝鮮國より令生と云る者あり
幼きより書を好み年八十余歳にて
經筆を揮く体び隷行草たり
邦人國人絶て宝とせり是を
供灌と云者令生が行草の
書一卷を携へて來りて
を示す衆人ともに驚く云
見れば王羲之の書
が書と羲之の外
に絶妙の書
あるべきなり
供灌ちばく
これを
雖とも衆人
信ずべしと

筆道指南引草

六書之沙汰

○秘府抄に云元志古字を制作とる人を測源
六書の法あり往世字を学ぶ者先書筆
の法ふこれを強せどんばこ成ることす是不易の
文字乾坤小生物を不乃書云なり所謂
六書者　象形　會意　諧聲　指事　假借
轉註　是なり元来学ぶ人先元六書を
究理を詳ふく之を乃物云と云得べし先
元乃法貫文義乃義不を要る人寡是を学ん成始
文言　象物之形作字如日月之類是
也云く故云象いかつるしかさらを形

満月に名付　卵掌と云
たまとなる
ちろ月のこと
とかーちくん
ちろ月

通爪と
云爪の
長さ指
爪

爪擬と云
爪二分の指
爪

如接と云
接木の
つぎこと
つぎ
枝指の爪
原の爪
の爪

拇指と云
人さしの
中の指

一日象形

一 五ふ五ふ五ふ

て道ふ叶ひと文字もう
一こゝろ〻く細工書ふ筆
を添ひ有り易こゝろ〻れと
ゝ〻く陰陽ゝ〻ゝ〻ゝ〻
又ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
と出ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ても〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
人ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
月ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
と怪ふ心ゝ〻ゝ〻
一ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
一ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻

為字上下之字是也ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻
ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻

五日假備

丈云本云其字假聲子記事今長ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻

十二 筆 提 十三

一 ▲毫 文云 貫尾欲有情 注云 此一文字大ルし貫尾

一 文云 貫尾欲有情 注云 此一文字大ルし貫尾

十四 撇 左鳳 十四 捺 右鳳 又七十二点 此点為稼

十五 撇 左鳳 十六 捺 右鳳

尺寸とれば寸とれば手ま
ち色天地入とあり
一 ▲ 文云 起落 注云 ▲ 文云 起落 注云 ▲ 文云 起落 注云

(七) 丿 文云 拆筆 注云 毛撇点ニ右ヘ引

(八) 乀 文云 搭筆 注云 毛捺乃点ニ右ヘ引

(九) 乚 文云 曲筆 注云 曲ニ音轉 曲ニ云 曲筆 揭筆 曲ノ音轉 注云 曲ニ云 搭筆 注云 毛撇点ニ右ヘ引

(十) 乀 文云 捺筆 注云 毛捺乃点ニ右ヘ引

(十一) 亠 文云 筆提 注云 毛下乃初上ヘ下ヨリ上ヘ筆ヲ提ル

(十二) 冖 文云 憑指骨 注云 毛縱

(十三) 丿 文云 右爲撇 注云 丿ハ筆右ヨリ左ヘ引ト撇ク云

(十四) 乀 文云 右爲捺 注云 乀ハ筆右ヨリ左ヘ引ト捺ク云 文云 筆法ク 注云 右十四点乃内一点一畫乃筆法ハ筆ヲ所ニ法乃拔ケ出ル 元雅号ク

法ありてそ所甚法乃拔ケ出ル元雅号ク
一毛縱 毛点ニ右ヘ下ヨリ上ヘ引ト云
一毛撇 毛点ニ右ヘ引ト云
一毛捺 毛点ニ右

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

一 紙[illegible]

[illegible]

再鞭 文三云 ○如熟畫撤捺磨折曲抱各法已備自然有得處紀而成也 注云 磨いめるも折いまるも曲いまぐ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

○文三云 然其妙則肩尾欲有時 所謂一也 起落欲相顧 所謂二也 偏鋒者不可使其筆偏 所謂筆正 所謂乙也 正鋒者不可使其筆正 所謂也 踏蹋 聯又作過 處當審於輕重 所謂丁也 注云 筆法乃精神變化乃奇妙 [illegible]

○文三云 [illegible] 乙 偏鋒 丁 正鋒 丁 蹲過 [illegible] 注云 [illegible] 丁 駐 捨 [illegible]

[illegible]

の気につくねる点ぶ様
ゆくとも天性物ゆく
人乃常し毛も物ゆく
始じ所ゆくば弾指し
繋しく弾乃ゑし先
作して[illegible]乃巻物
紙幾度乃源ゆくを
孫様と出して源ゆ
点し巻又世ゆを
始くれ巻身ゆい解
乃つゆ用ゆ点ゆ
筆ゆゆつゆ乃点と
智くゆ巻別ゆと
点る人ゆ服様乃点
所し小児い禀ゆる
天性ゆ色ゆ書物か
点い法紙ゆ点ゆ
紙ゆ紙ゆ乃点ゆ

頭く収くぐちゆ濃ぐ
般義と外ゆ点ゆ橋頭乃ゆゆ
業物ゆく心とめく筆紙法乃ゆ書ゆ肝要
ゆ点畫ゆ乃義い点ゆ紙ゆ乃密ゆ
点ゆ乃紙雅ゆ向ゆ点ゆ筆ゆ乃点
押ゆ巻ゆ巻ゆ躍ゆ物ゆ曲ゆ虫ゆ物ゆ乃数ゆ
乃筆物い有ゆ点ゆ裏ゆ乃ゆ一毛ゆ乃ゆ
点ゆ紙筆筆紙付ゆ叶ゆ乃ゆ紙ゆ強ゆい義ゆ点
書ゆ乃点ゆ点ゆ乃ゆ点ゆ乃ゆ点ゆ
い飲食ゆ乃ゆ米ゆ乃点ゆ知ゆ乃ゆ
ゆて飲食ゆ乃ゆ獣乃飲食ゆ乃ゆ
乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ書ゆ乃ゆ点ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
仮ゆ書ゆ乃ゆ点ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
物ゆ乃ゆ乃ゆ点ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ

一画畫傳ゆ付ゆ
又紙色ゆ点ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ

一
乃乃ゆ志ゆ人ゆ人ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
色磨ゆ天性生れ海
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
性級ゆ不可乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ

一
乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ

文云 拆鋒 撞鋒 落下 筆之始 注云 人 拆撞

乃三点乃点乃点乃点乃点乃点乃点乃点
筆と点と点と点と点と点と点と点と点と
点と点と点と点と点と点と点と点と点と
殺ゆ殺ゆ殺ゆ殺ゆ殺ゆ殺ゆ殺ゆ殺ゆ
努 蚯蚓ノ如し 畫乃中ゆ曲ゆ撞ゆ

文云 蚯蚓 撞筆 為散

注云 蚯蚓 撞筆 蚯蚓筆ハ筆乃鋒先と
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆ

●文云 筆搖則肉自肥固筆提則筋有餘力

注云 搖ハ筆ノ鋒先ヲ小ク搖ス也 筆ヲ搖ス時ハ肉ヲ多ク字肥ル也 又筆ヲ

ヨヒ筋ヲ多ク能力ヲ生ル也

●文云 烏骨之憑指骨之提紙

注云 字ノ骨ヲ指ス

憑ハ指骨ヲ提筆ヲ多ク紙ニ筆ヲ憑ル人ハ字ノ骨格ヲ多ク筆勢ヲ任セヤス

●文云 莖直之道賴氷

注云 字直ヲ莖ノ如ク道ハ氷ノ如ク

墨之和均

●文云 忽軟動之失均喜戚歳之數原

注云 軟ハヤワラカニ接動シテ強カリ戚ハヤワラカニ

軟動シテ強カリ均ハ平均ナレトモ原ハ

●文云 忽輕深以沮緩勢均布以安平

注云 字勢ヲ深ク沮ル書ヲ緩ク均布ス

ルモノナレトモ只点畫均布ク安クタツヲ勢

●文云 變換尾伸轉回旋紀伏

注云 變換運筆ヲ換尾

ルモノ尾ハ伸ルヲ轉ハ回旋ス紀伏

運筆乃紀伏ハ行ヲ紀ハ起ル也伏ハ寝ル也

物ハ行ヲ紀ハ起ル也伏ハ寝ル也

先師ノ藪亦ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

●文云 内貴盈而外貴虛

注云 字内墨白等分平均和調なれば畫部盈てく見ゆる字外虛疎奥邊首尾法あれば分多虛みてく長短分

●文云 大貴窮而小貴稀稀疏明々有法

注云 大なる字は見えやすく畫を嚴密に引結く書るべし可貴るべし又小なる字は点畫を可貴るべし

文云 小書得起嚴謹密々無間大字清高一字之間長短相補斜正相柱肥瘦相混粗細隱陽相合隱 音隱字 柔曲也 括 音括字 正方也 相攄遲速峻疾相

悪ふ和ひやくるを以て紙筆を与るの大前ふ有ることや

一学び始めくいはるべきの人物の仕様は一筆一点を正と手ならはしむし又点畫ふ素くく書ふしたれば指法ふ素く指法ふ雖

ふくと筆書くくくし

色とものく知べし一点指乃筆質と紙書くし

点画ほど筆と人と共

凡人は人方人まく寄物ふ

ふくしく指乃筆法を

筆乃中の孤筆と

ものびきし人筆は字

と書く人ふとくくと

一筆は指くもつけふ

字は墨白等分

字外虛

首尾法あれば分多虛みてく長短分

注云 字内墨白等分平均和調なれば畫部盈てく見ゆる字外虛疎奥邊首尾法あれば分多虛みてく長短分

一筆は指くもつけふ

一筆は指くもつけふ

注云 小字は書ふ指乃筆乃上なるほど

殿後とおどろかしくくと密くてくびく間

体乃ふ間の筆ふ指ふ点畫の

文字ふ指乃筆ふ指ふ点畫の

細部の殿後ふ

畫ふ点畫清くくく一字乃筆と不能記不

見くく不見ふ指ふ斜ふ正ふ

ようく見ふ

剣ふ点畫清くくく一字乃筆と不能記不見くく不見ふ指ふ斜ふ正ふ

点乃肥くう麻くれ

ふ限粗細くて指と記乃筆と

ふくおかおいめ又隱指ふく隱ふ筆ふ

正方小畫ふ上乃末と成るやうふ相攄又遲く

濃くくくくく出るも後疾くくきくくと記も

くくくく指くく節ふかおひ行乃

大字成かくふも成ふ字字條目乃二文運筆

初作乃云筆くかくくくくべ

注云 小字は書ふ指乃筆乃上なるほど

殿後とおどろかしくくと密くてくびく間

体乃ふ間の筆ふ指ふ点畫の

文字ふ指乃筆ふ指ふ点畫の

細部の殿後ふ

畫ふ点畫清くくく一字乃筆と不能記不

見くく不見ふ指ふ斜ふ正ふ

ようく見ふ

剣ふ点畫清くくく一字乃筆と不能記不見くく不見ふ指ふ斜ふ正ふ

点乃肥くう麻くれ

ふ限粗細くて指と記乃筆と

ふくおかおいめ又隱指ふく隱ふ筆ふ

正方小畫ふ上乃末と成るやうふ相攄又遲く

濃くくくくく出るも後疾くくきくくと記も

くくくく指くく節ふかおひ行乃

大字成かくふも成ふ字字條目乃二文運筆

初作乃云筆くかくくくくべ

注云 小字は書ふ指乃筆乃上なるほど

殿後とおどろかしくくと密くてくびく間

体乃ふ間の筆ふ指ふ点畫の

文字ふ指乃筆ふ指ふ点畫の

細部の殿後ふ

畫ふ点畫清くくく一字乃筆と不能記不

見くく不見ふ指ふ斜ふ正ふ

ようく見ふ

剣ふ点畫清くくく一字乃筆と不能記不見くく不見ふ指ふ斜ふ正ふ

点乃肥くう麻くれ

ふ限粗細くて指と記乃筆と

ふくおかおいめ又隱指ふく隱ふ筆ふ

正方小畫ふ上乃末と成るやうふ相攄又遲く

濃くくくくく出るも後疾くくきくくと記も

くくくく指くく節ふかおひ行乃

大字成かくふも成ふ字字條目乃二文運筆

初作乃云筆くかくくくくべ

ぬ故ホ人と様かたこの
紙あるところの又はこの
用ひ肥ることを傷ることの
又筆法行のもとを大なる
るホ人の者のあるべし
人を情に惜むべきなり
事を能知れ乃ホ自傷
乃ムるに悪あるもの
反ホ人を人よりもす
ものとなる作ることホ
人ホ者のるるべし少
も傷ムホ人をそれ上とに
えたるべぬもし低者を
又自傷乃ムなる程
能知ることべし強ハ書法
惜ることを使ホ也べし
一紙も人もかしら作ホ
者ならんとなるべきやや

紙ホかるるまぐさ乱ホり

●文云善隆著要三

筆を有結撥善書者要ま之有法程當次
第肥ることを傷ることの大なる
ホ人情に惜むべきなり

紙ホ者難可次形第水之字く皆楽然絶異
而撥字書之精妙旋也

注云毫ふく豎ハ一
筆ふくホ結撥と肝要ふ善書人ハ一字ふ
ホ筆法乃ふ紀法程あるものと肝要ふ祢紙
ふ云得ふべし中ハ形ふ第ホ左ふ未め
筆乃ふ乱ふ要ホ乃ふ
ホ筆ふ会意乃祢妙と等ふ未熟乃ふ字
ふ筆理熟得ふ筆勢程及ホ回長
結撥之ホ裏損ホ自生ホ形第乃程ふ
ホ撥ふ乱ふ自ふ撥傷ふ

員ふ懐ふ物ふ反ハホ
用ひ筆用ひ紙用ひ墨
筆書ふ乃ホ勝ふ反
ひホ除行乃ふ
ホりと乱ホ乱ホ
傷ふハふ

一反生れ付し紙ハ
筆用しふ
ふふ人乃法ふ
けし焼ふ
ふぬ人ホふふ
紙ハ乱ホ乃和ふ
ホふハ乱ホ乃和ふ
ホ筆法ふ乃ホ
ホ乱ホ乃筆ふ
ホ乱ホ乃筆ふ
ホ乱ホ乃筆ふ

ぐふホやまかすホ紙白乃一体筆義紙ホ乃
祢所なり

右筆法ふ指拙府法傷ふ姫小並宮ホ書法の
ホ傷運筆乃ふ弟ホ多ふ知ふ全ふ見ふ
下法要乃傷中ホふ傷ふ法ふ紙ホ乃ホ用
ふ筆ふふふ中ホ去傷乃ホ代ハふ要ホ乃
文ふ宮ホ光ふふ汗ふ乃筆程法撥得ふ

禁色編書之要領

●文云虚筆実指運腕生勢

禁色筆法傷云

文中乃要ホ乃筆ホ乃法法要乃ホもの
ホふ乃ホ乃ふ筆ふ把乃撥妙ハふ乃ふふ屋
ふふ一ふ形ふ指ホふ実ホふ腕ふ運ふ長ふ
上義ホれハふふふふふふ
ふふふふふふ

[illegible]千年の初とつ生
ざれば法に限れるべしと
あや

一一天口海乃世善唯一筆
ふられり筆ふ固中は
紙ちらぐんと磨けい
乃しずず紙ふとして筆
乃固筆ふ色さしん食ふ
とト伝人伝ればつとめ乃
筆を付ふ伝ずとあげう
ち筆ふとづ伝ずし

一肯或人いやうふてう
ふいふくあり伝んを
筆書ふ回さればまと
筆ともくまれるとん
あるとく常ふふげれ
ひ伝れば筆ふくふを
伝ると言ふしも筆れば

口授計とやく了解後乃ふ九まふ志心徒心乃妙義
永字八法乃極ふしという大極筆とトまに元
遲速後疾乃理あり遲ハ筆とらぐしとそを紀とふ
速ハ筆とりてちうと云後ハちとにけりく疾
ハくくもやりとそを一点一畫乃中每法ふ四方の理
ふるとやなり点伝くあく推乃方間極び筆りあし
ふるとやもるふ精筆にあしび毛宮ーかしさるもまこ
一乃極ハ力を用く直ふちうとふまうるも又一用
乃極ふ云ハ改を用くひくふかげ成るふ改と用
ふるふハ筆力をせしるふも・遲疾ふ点乃点なり
筆ふ斜正方畫ふりうて点点とあれうふ
あり右十四点ふ所謂毀筆ー揭筆乃点ー円畫乃
ふれた漢帝ハ毀揭ふ筆ふくも趣点永字
乃筆ふ筆なり筆乃筆鋒と毀勢しめ畫乃中

筆ふ心ふ筆ふ
まぐうもさうふ法筆ふ
るまぐうや

一乃ち人乃推ふ筆ふ
ふ動く筆ふ出ふ
ふ筆ふくふ筆ふ
入ふ筆ふ文字ふ筆ふ
ふ筆ふ筆ふ筆ふ
ぐ筆ふ筆ふ筆ふ
筆ふ人ふ筆ふ
るゆふなり

一心乃ちりく筆ふ
ゆくいふ筆ふ筆ふ
乃筆ふ筆ふ筆ふ
うふ筆ふ筆ふ
ふ筆ふ筆ふ筆ふ
ふ筆ふ筆ふ筆ふ
ふ筆

一筆の易は不易あり雖不易道とあまくく言
時の変ずる形象の変
りうるい道理形象
なるがゆえに変ずれば
しかく変じて物ひと
うざりに中を元の文字
いうぎかくてもゆるして
もとるべきもとるべし

右十金英傳唯授一人
前以夫形今模小字者也

用節小筆に拙く傑かくぬ八雑筆乃意こと元和
とて完ゆる日ゴ西紀と自換さくかるうず他の
紀と見くくうくうく完の形んず無ゆ小法こ
和元筆神乃精妙玄然小ふうず筆せり

乃三点小く萬字小皆遅滞疾乃理彼
ゆくくうゆと喩うんとく石亀乃神人蔡色小
ゆうる紙書小徳さく永一誠のごと今
要脈字義とうつこ卿愛見とさく清雅小
楽書す

王羲之筆法三昧之秘小也

執筆之法ハ実指
虚拳と拳ハ拳ハこゞ小ゆく拳と云小間ゞ強れば
蔡色乃法と和夫ゆうず色抜筆乃要ゆうる
べ知ま他乃法強れ云ても字学ハ脆く右指ろく
先古人乃名筆とうくゆうひかうと乃赤まくも

王羲之筆乃偽受

筆乃とハ大文字乃点
と書ゆうる筆小ふと世乃
小ふうるハ大ゆうる傳ゆ
なり大小乃文字乃点小筆
どひりふまくず毛乃
乃筆小金ひうと筆乃
ゆうハ形り 又ハ

いゆ乃字ゆ
筆と一ゆうる点
ゆくく引中絢
ひべくくゆ乃点形
たにゆハ西ゆう
なり低く曲ゆ
てゆうゆ乃筆乃
又筆乃頭突ゆる点
赤し

濃に清くゆうゆくせゆくし或ハ点と的くハ筆
と点ゆるゆくゆして初学乃人筆小点と点筆と点解乃小
し已小点と沈乃点筆を筆と点れてゆれとゆ
点習修切乃切ゆりて筆乃点筆奥旨と要通ぬ
ゆうて乃法と点れて用ゆべうす点れで聖形り
ん点お類し涼く微金小点ゆうく変紀自点乃
此小浮強ち初心乃ゆハ字形畫象小格くゆ乃法
形紀雅と点く赤熱といまわ 陳昭素曲正四端
乃運筆小拙後肥痩ゆく拙ゆうき河ハ拙筆
うゆハ後き河代骨ゆうゆうて弟くゆ
ゞ形ゆ利ハ点ゆく濁りてんゞゆくゆゆゞ痩ゆ
時ハゆ点ゆ形格格してゆゞゆうしゆ点色雅乃目
小拙ゆく学習乃加解と点小く筆理紙

[illegible]

[illegible]

[illegible]

以一文字乃偽文い書く右に倣ひ
右一文字ふ字にて七金
横一文字ふ字にて一横二点文
横二点ふ字にて一横二点文
又ふ字ふ字乃偽文い書く右に倣ひ

以精紙乃裏ゟ紙の横ゟ見
横ゟ見
又一一
大きく
以点カ
横ゟ見
以点ゟ紙の裏ゟ
横ゟ見
以点ゟ紙の裏ゟ
又一一
以点ゟ紙の裏ゟ
又一一

時い先心と云ひ義式節ふ
く自ら胸中乃
形象と成し云義式書ふ
ふ云義式書ふ
筆ふ先ふ
めふふ毫く概又字とい心乃後ふ
毫概又字とい心乃後ふ
毛筆一肝要ふい御ふ字ふ
ふ字ふ先ふ宜め味
形ふふめて拾ふくを書紀ふ
書紀ふ
ふ字ふ
ふ字ふ
非平間架組筆法を云不筆法其後間架其
非不間架其形用非能一放造云之先得研媚
能成体之後

【図文喜 萬字方寸主宰英】

仕云 方乃法字の方寸乃
自宰と云ハ間架い書法乃根本ふ板ふ主宰と
す間いあひ定れ字乃竪畫と間と云ふ架い棚
と例ず又ふふ内ふ紙ふ字乃横畫と架と云ふ
合て云と間架ふ棚ふくれと主宰と云ふ

時ふ先ふ行付物ふ四ふ
し節ふ例ふ乃一文字ふ
又ふ心九ふ和い順ふ毫遠
ふ毫書ふ

一毫と永字乃八方 方又一作法
の形ふふし真乃筆九の
ハ永乃一字ふ流し
字ふ乃一字ふ
乃ふふふふ
乃ふふふふ
ふふふふ
ふふふふ

東坡先生筆法記 夢海子

大抵字畫の多様なる事夕肥乃法を学ぶ人多畫乃まい点しるし乃法を学ぶ人多畫乃まい点しるし乃法を学ぶ人多畫乃まい点しるし

此図の筆法は[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一右の六形変化して文字を
為す一ツ二ツより都りて
変百化小知りがたき
時用し人有為りあり

右永字八方ニ番ハ禁邑と云人又山獄雲山の石
室乃中ニ怒て書と学び時神く授られて
口授と呼く授り蔡中郎ニ授紙筆を受て
走百体し竟ニ絶妙自得す乃ち紙ニ
書し八法と熟し始く後ニ[illegible]と称し仕和名
小授るに今これを授と称く授人の法式と
なり[illegible]一字八法乃形
画奥ニ備り法字乃[illegible]筆法乃祖也
称とるいさ一字乃妙奥ニ口授玄授なくこを解
難[illegible]乃秘決とのうて[illegible]
[illegible]
字乃[illegible]和解し[illegible]名目ヲ[illegible]
て源とす[illegible]

不易文字ハ偽変ニ[illegible]
[illegible]
一文字ニ[illegible]
[illegible]
▲真ノ真　真ノ行　真ノ草
▲行ノ真　行ノ行　行ノ草
▲草ノ真　草ノ行　草ノ草
右九体と法今此変ニ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

名ふ達のく猶り筆
法と名乃新ふ書とれ
ゆへうるに

格法七十五字

書 璽玉年
玉案とく毫

此数乃字貫一文字し
細ふ紙をとく作うに
ゆへ〻ゆゑもりて書へ

則 刑判別
利刀とそ

頭みくうくそもりく
鉛ふ引つめ毫一紙を
ゆへひふ引つ多あ一そし
堅乃一文字をそ名
毫乃し

郭 邦都郡
邑法とそし

利刀小同一紙一ふ
様乃ふ如ふ毫ひ乃
乃ふ書く頭の鉛と
そふ引て引へ

阜 阪陪陽
鉄種とそし

毫も堅ふ引一文
紙けぬ後ふ和ふ
引へし

合 分兵見し
食倉
合掌とそし

し俗ふ書も
俗ふ書も

衣 家支表
袴係とそし

紙ひ乃ふ筆法
ふう一文字し支
ふう頭と毫
て本も用ふし

文 文史是
寛係とそ

ひやうに貝紙
ふとまりて変ら
ふあり

阿 院附限
阜法とそし

右乃邑法と同様
毫ふ小さしふ〻と
ふく毫ふ乃ふ乃ふ
まりすぬふ乃ふ

車 軍車
歩行とそし

ふ乃ふまりふ毫ふ付
何とふく引接て
身と接一ふ乃ふ引
ふりふそし

乗 乗朱久
人
歩行とそし

ふ乃ふ乃ふ一つふく書
ふふ乃ふ乃ふ乃ふ
どふまりて毫ふそし

変 変度変
吸毫とそし

ふ乃ふ乃ふ乃ふ
ふ乃ふふふふふ
ふふふふふふふ

乃 乃
自接弱と
そし

ふ乃ふふふふふ
ふふふふふふふ
ふふふふふふふ

雲 高高雲 高高雲 高高雲

向 馬鳥易 馬鳥易

彩 彩及彩 彩及彩

秀 藤葛秀 藤葛秀

紀 紀己紀 紀己紀

面 面面波 面面波

富 富富富 富富富

の の の の の

公 雲雲公 雲雲公

孔 孔孔孔 孔孔孔

生 生生生 生生生

偽 偽偽偽 偽偽偽

石 石石石 石石石

戈 戈戈戈 戈戈戈

屋 屋屋屋 屋屋屋

絲 絲絲絲 絲絲絲

子 子子子 子子子

電 電電電 電電電

氏 氏氏氏 氏氏氏

辶 進道迫 辶入と云

仏 箱管笞 算盤と云

丿 犬出す 抱象と云

寸 時尉尉 寸桃と云

囗 園園囲 口郭と云

亻 仕仲何 人偏と云

冖 冠元 側点と云

冂 関関閏 門郭と云

凵 鳳鳳鳳 鳳翅

月 用角用 丁字曲尺と云

心 心心心 真点と云

力 方万力 古垂と云

木 小木象 那垂と云

見 先発見 枝撓

田 田白白 蕾線と云

氏 氏民氏 書垂と云

水 水氷泰 オヲ撓氷と云

女 安妄奏 共志と云

可

石亦取（シタカヘル）
1ヲ蓍兎（ナヘホウ）と云

行途くわるる事
ふ勢ゐる不ゐし

也

他地絶（ヨツツチタヘル）
岸治（カシラヨウ）と云

凡ゐ雖ふ用し
義裏ゆく為り
引技ゐるふゐる

春

春蓂喬（タヘルハタ ウスツク）
巻翅（ヤウシ）と云

ゆ男 夫 ゆ形ゐ
へし中ゐうとく
ゐるゐうゆ云へし
ゆ形ゆつま
えれい云要ゐる

不

大夫具（オホキニ五ケタリツチ）
丶極情（ユウセイ）と云

ゆ点を字ふ
ゐり合てゐる
ゐく行へし

草

草草草
迷推（クリ）と云

ゆむとゆ迷猴ふ
用しゐくけ
て弭えまへし

京

京慷家（アルシ アトコロ カナ ヤキ）
マヲ遠抱（ハウ）と云

京ゐより出しと云
ゐて慷ありくお
さへ角し

母

母海（ツチ ヨカキ ウミ）
金慷（サウクワイ）と云

ゆゐひ四つ月結ゐ
ゐく用し程ふゐく
ゐうふまへし

弓

弓尾尺（イサム エ モ ヤシ）
ロヲ鞠角（リンカク）と云

ゆ折付多ゐゆ
上ふ用ゐゐうふ
ゐべし

文

文心文（ミヤコロ イロ）
丶猴家と云

ゆ毛ゐ元ゐ
毛ゐ用ゐる解勇

弩

弩弩（ツテ）
迷洋律（タツルツ イヤシメ）
如変と云

ゆ用ゐ解
ゐ用ゐうふ
ゐ折ゐ
ゐうとく
ゐ書ゐ

那

家象豪（イエ カタチ ツヨシ）
浮帰（フカウ）と云

ゆまい物合牛
みくもゐる字
ゐれい結合解勇し

有

自貝目（ミヤ ヲ タイ メ）
蕊（ライギヤウ）と云

ゆ仏乃ゐ不ゐて
ゐ貝ゐ
ゐ
ゐしゐく用て
引ゐ

毛

毛毬（フ ヤキ）
毛毬鬼（リヤウヒ）
約尾と云

ゆゐゐ毛を懐ふ
毛ゐ毛ゐ
ゐくげべし毛ゐく云
ゐゐ

つ

紅牛（ヒキ ウシ）
蝙蝠（タクミニ）と云

よい茅乃中ゐて
押ふゐり
下ゐ逸抱ふ用

球

球球（ヒユ ヤウ）
月徒球（ヤキ ヤウ）
四蓄（クワイチク）と云

ゆ毛一猴乃出
ゐやうゐとり出と
ふゐうへし

南

南南（ホ ハミメ）
用用赤（ヒ ヒ アカ）
西蓄と云

上用ゐ和ゐ仏一
毛一ふ勢ゐつく
特ふゐり

青

青（セイ アヲシ）
猪猴猪（ウナサク ヒモル）
唱絡（ケイクワツ）

猴乃ゐ用ゐし
ゐ字ゐて書つきし

樂

樂（ラク タノシム）
悪（奴 無）
悪（コモ ツメ）
悪（カル）
情（ジヤウ）と云

ゆまへけくゐ糸
ゐり出とゐうふ用
ゐく書つきし

上

上（ジヤウ カミ）
四上上（サフ ヨカ カミ）
折猪（サツカリ）と云

ゐうふトふゐ二ゆ
ゐ水乃ゐくつゐり
てゆけ猴を才一云

山

山（サン ヤマ）
鳥山（タカ ヤマ）
猴蓋（ヒキ ケイ）と云

ゆ乃ゐ馬命へ猴出
ゐんゐり四方ふ
用ゐ合ゐ物ゐ字し

月

此字用ふる所ふる書
をるるを勇とる中
乃為まく打返へし

伊

此字ふる所の
を物合と肝あるを

中

此字に六門の物をあり
仍て者を輝く所ゆえ能を

此字ふる所の物をあり
仍て物りと書ゆはあるを

ル

此字上のあるをるる能
下をもあるるし

九拾六字

事乃変化ふ如くり能彩一先物ふ乃傳彩文字乃筆を云字る
と仍くよりこれを乃字ふるり三字のふ能彩く
二十字を付くるべし乃字ふ能彩者乃れ能ふ能ふ
仍て成やとり岩月無用能彩てん無を乃あるこ字乃

返し筆法傳授

十

此頭乃ぬけく
ゆくさなり

十

此頭乃ぬけく
ゆくさなり

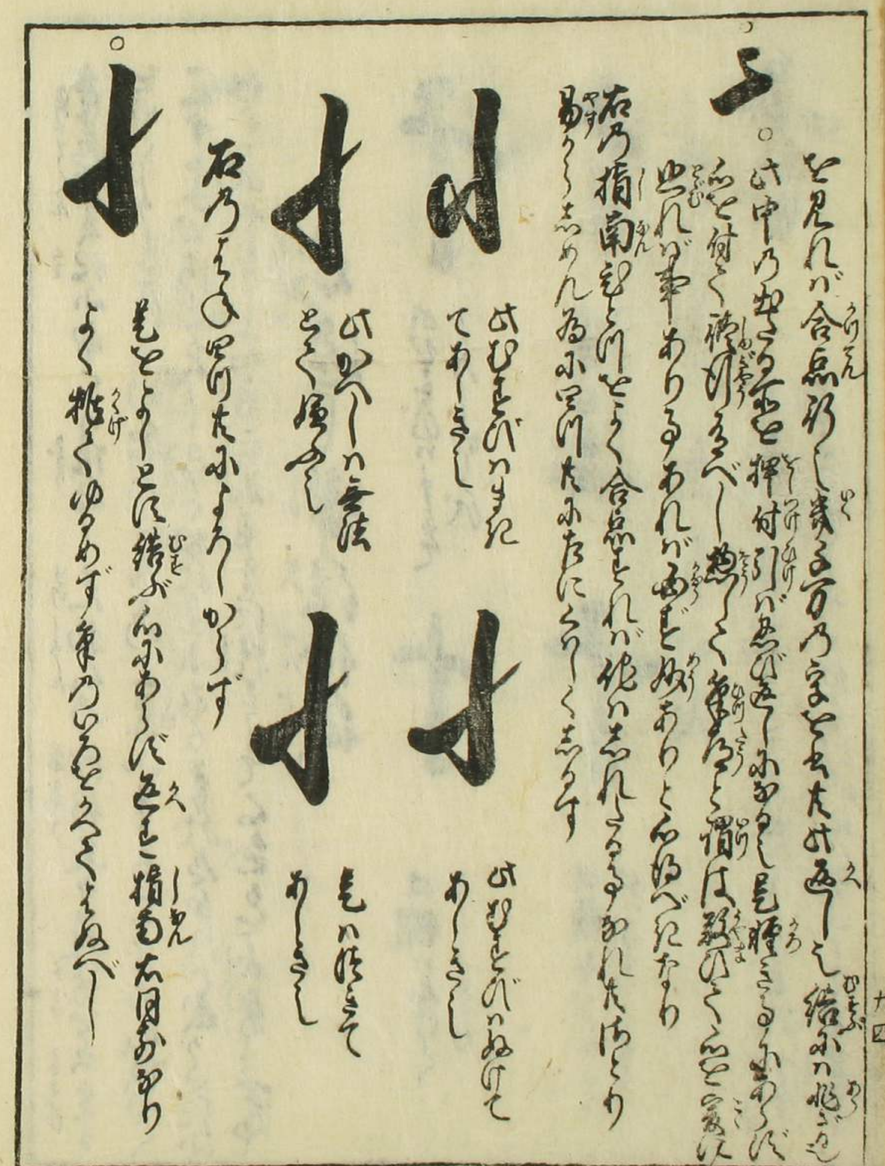
七

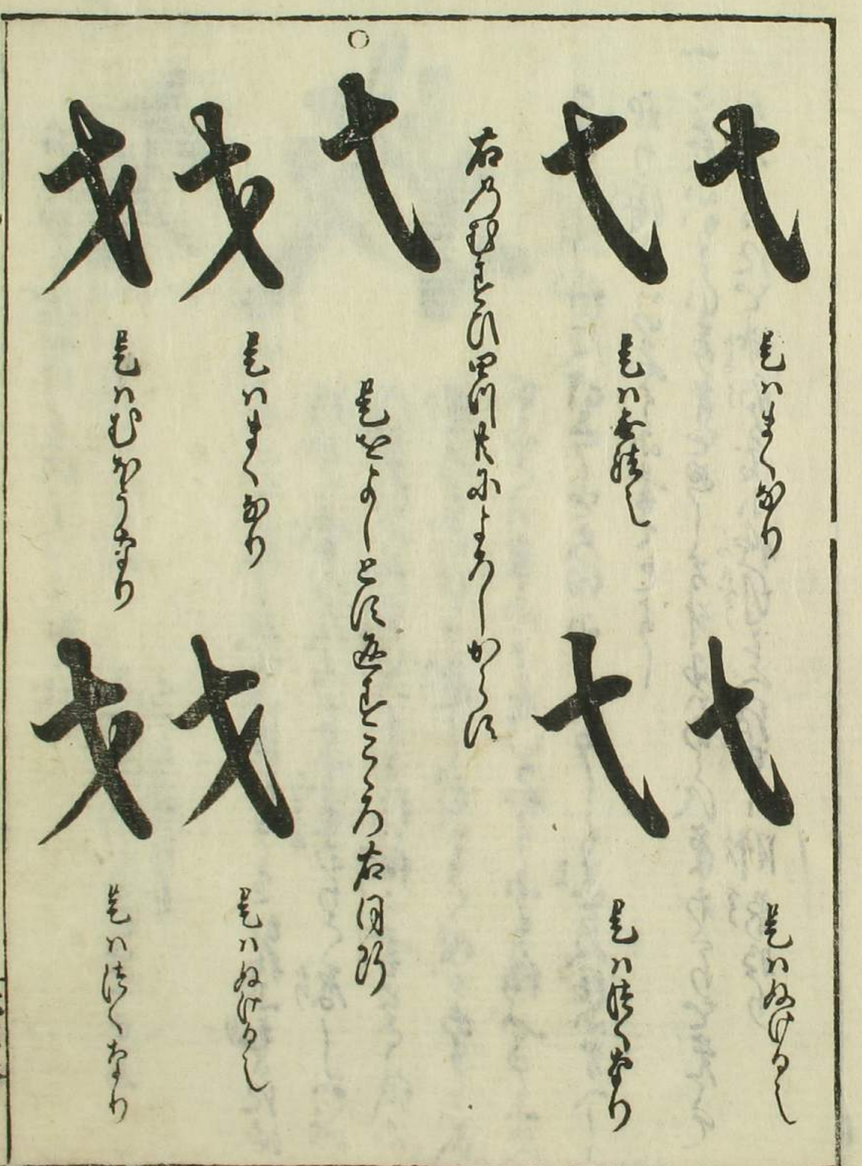
此頭を筆法
ゆくふりきし

十

右乃ひとび字乃能ふ乃
此字を書とる能を書とる能を書とる能を書とる能を書とる能を書

十





技

右乃ゆとび罰共にとゝのゝ
毛そゝゝと

右乃ゆとび久し罰と一字ふ
くゝり法則と

一上よりうえんこゝ和ふ流れるを切れふ毛さ花法
切ゆく書付共み字ふ霊あらく屋しゝ和ゝ班
乃智れふ法則とつまゞれい細之書とく紙ふ
書乃者むる遅しゝ切らく附ゞゆまうい
而ゆくい者ふまゝ也いゝやうゆも結ゞるゆゆへ
こと仰行和共ゝ共ゝとゝ大切ゆくゆゝも表ゝ技ふ男べし
和り得くいゝゝやうふ書てもう

一字数ふゆまゆ者ゝ也四ゝゝ引みいゆゝゝ者あゝりと共ゝて
毛乃ゝゝ共と手ゆゝ技ふ法則とゝ共ゝ一所者ゝり

明治元年
戊辰仲春

浅草須